

第4回はけの自然とくらしのフォーラム 詳細レポート



事前開催 エクスカーション

フォーラム同日、武蔵野の雑木林、湧水とワサビ田など、地域連携で取り組んでいる国分寺崖線の多様な自然再生の場を視察するエクスカーション（見学会）が行われました。30名が参加し、午後のフォーラムに向けてそれぞれの活動について理解を深めました。

日時：フォーラム同日（令和7年9月29日）10:30開始（10:15～受付開始）

集合場所：国際基督教大学内

見学先：ICU 三鷹キャンパスの森▶三鷹市大沢の里▶都立野川公園自然観察園▶都立野川公園自然観察センター

●エクスカーションルート



↑国分寺崖線（はけ）が生み出す地形・水・森の連なりを実際に歩いて、肌で感じることができました

◎エクスカーシヨンの様子

東京都三鷹市から小金井市にかけて広がる国分寺崖線は、豊かな自然環境と歴史的価値を持つ貴重な場所です。エクスカーシヨンでは、**国際基督教大学（ICU）**のキャンパス内にある自然共生サイトの取り組み、**スバル東京事業所**の緑地保全活動、そして**三鷹市大沢の里**のワサビ田、**野川公園自然観察園**を訪れ、それぞれ地域の自然環境保全と再生の取り組みについて詳しく紹介していただきました。雑木林の更新、ワサビ栽培の歴史、武蔵野の希少植物の保護など、多角的な視点から国分寺崖線の価値と課題を探ります。



↑ICU キャンパス内にて自然共生サイトなどの解説を伺いました



↑三鷹市大沢の里古民家のワサビ田の見学

◎国際基督教大学（ICU）の雑木林再生プロジェクト

エクスカーシヨンのスタートは、国際基督教大学三鷹キャンパスに集合し、理事の中嶋隆さんより、キャンパス内で進められている**雑木林再生の取り組み**について解説がありました。

ICU のキャンパスは国分寺崖線上に位置し、雑木林や竹林など武蔵野らしい自然が広く残されていますが、長年十分な管理が行われなかったことで、近年はナラ枯れや倒木が進行し、学生の安全確保が課題となっていました。そのため昨年度には約 900 本の危険木を伐採しています。

現在は「雑木林再生プロジェクト」として、**約 250 本を対象に更新伐採**を行い、**草木や生きものの変化を観察**しながら、かつての雑木林の姿を取り戻す取り組みが進められています。今年の夏には、日当たりが改善したことで**ヤマユリの群生が確認**されるなど、**自然の回復力**も見えてきました。



↑ICU 理事の中嶋隆氏（右）。進行役は武蔵野の公園パートナーズ
エコロジカルマネージャー 金本
敦志氏（左）

ICU のキャンパスは 2023 年に環境省の「自然共生サイト」に認定されており、教育と環境保全を両立させながら、将来的には生物多様性に富んだ持続可能な森を維持することを目指しています。



↑ICU キャンパス内「雑木林再生プロジェクト」実施エリア。更新伐採後、武蔵野特有の植物が再生している様子を見ることができました

◎武蔵野の雑木林の「レファレンスサイト」として

東京農工大学 植生管理学研究室の吉川正人准教授は、ICU の雑木林を「武蔵野の雑木林の“レファレンスサイト”になり得る場所」と評価しています。

このエリアには、典型的な雑木林に見られる植物が一通りそろっており、都内では貴重な存在です。雑木林の植物は、かつて薪炭利用による伐採で林内に光が入る環境の中で維持されてきました。

今回のナラ枯れ被害は災害的側面を持つ一方、**林床に光が届く「再生の機会」**でもあります。ただしナラ枯れの場合、萌芽更新が難しいため実生由来や鳥散布による再生に頼ることになり、武蔵野本来のコナラの森とは違う植生へ変化する可能性もあります。**利用を前提としない現代にふさわしい雑木林の保全のあり方**を探る必要もあると指摘しています。



↑東京農工大学 植生管理学研究室の吉川正人准教授（左）

◎ICU キャンパスに息づく、貴重な動植物たち

ICU キャンパスには、植物だけでなく、都市部では希少な動物たちも生息しています。エクスカージョンの進行を務めた**金本敦志（武蔵野の公園パートナーズ エコロジカルマネージャー）**は、その一例として**カヤコ**

オロギを紹介しました。この昆虫は、周辺地域では府中市浅間山と ICU キャンパスの森でしか生息が確認されていない、非常に希少な種です。

また、ICU キャンパスではアナグマの繁殖も長年にわたり確認されています。ICU で 30 年以上、自然調査や動物研究に携わってきた上遠岳彦先生によると、アナグマの調査は 2007 年に始まり、初年度に繁殖個体が確認されて以降、現在までほぼ毎年繁殖が続いているといえます。キャンパス内では、タヌキやハクビシン、アライグマなどの中型哺乳類も共存しており、ICU は都心回帰が進む動物たちにとって重要な生息地となっています。

こうした動物が暮らせる背景には、腐葉土が豊富でミミズなどの餌が多い雑木林環境と、都立公園や墓地などが点在する「緑のつながり」の存在があります。一方で、雑木林は放置すると外来種の侵入などにより急速に環境が変化してしまいます。現在は NPO birth さんとも連携し、学生とともに手入れを行いながら再生活動を進めています。伐採を含む管理には丁寧な説明と合意形成が不可欠であることも、強調されました。



↑ ICU で自然調査や動物研究を行ってきた上遠岳彦先生（左）



←ICU の森に住むニホンアナグマ

◎研究開発拠点に広がる、地域と共生する森～株式会社 SUBARU 三鷹事業所の取り組み～

野鳥の鳴き声に耳を傾けながら ICU キャンパスを歩くと、すぐ隣に株式会社 SUBARU 三鷹事業所があります。ここは同社の研究開発拠点でありながら、地域の自然と共生する緑地づくりが進められている場所です。総務部総務係長の大島利美さんによると、SUBARU は「人と社会と環境の調和」を理念に、生物多様性ガイドラインと植栽ガイドラインを独自に定め、武蔵野地域の自然特性を踏まえた環境整備に取り組んできました。

敷地面積は約 15 万 8,000 平方メートル、東京ドーム約 3 個分に相当し、高木 787 本、中低木 804 本を含む多様な植栽が施されています。シラカ



↑ 株式会社 SUBARU 総務部総務係長 大島利美氏

シヤタブノキ、ムラサキシキブなど在来種を中心とした植栽は、昆虫や鳥類など多様な生きものの生息環境を支えています。

この緑地では、雑木林とは異なり、**常緑樹を主体とした極相林的な森づくり**が行われているのも特徴です。進行役の金本敦志さんは、スタジオの巨木を擁する**屋敷林「森山荘」**の存在に触れ、一年を通して環境を安定させる屋敷林が、今後さらに多様な生物を育む可能性を秘めた貴重な空間であると語りました。



◎三鷹市大沢の里古民家と周辺環境

ICU 南門を出て東八道路を渡り、切り通しの道を下った先にあるのが、**三鷹市大沢の里古民家**です。ここでは、三鷹市スポーツと文化部生涯学習課の主査・学芸員である下原裕司さんから、この地域の成り立ちと自然環境について解説がありました。

大沢地区は、明治以前から続く三鷹で最も古い集落のひとつで、発掘調査から中世までさかのぼる歴史が確認されています。30km以上続く国分寺崖線の中でも、崖線とその下の湿地が一体で残る場所は極めて貴重で、かつての入植当時の自然環境の面影を今に伝えています。三鷹市では「**三鷹まると博物館**」として、古民家や水車農家などの**歴史的建造物を現地保存・公開**するとともに、**在来植生の復元や外来種の除去**を進め、地域全体を学びの場として守り継いでいます。



↑三鷹市スポーツと文化部生涯学習課 主査・学芸員 下原裕司氏

◎江戸東京野菜「三鷹大沢ワサビ」の保全

大沢地区は、江戸東京野菜「三鷹大沢ワサビ」の産地としても知られています。約200年前、江戸で寿司文化が広がった時代に、冷涼で湧水が豊富なこの地でワサビ栽培が始まりました。近年、長く放置されていたワサビ田を調査した結果、DNA解析により日本国内でも類を見ない独自系統であることが判明しました。

三鷹市ではこの貴重なワサビを守るため、培養苗を増やし、ICU キャンパスや野川公園などへ移植する保全活動を進めています。一方で、河川改修による湧水量の減少や夏季の高温化により、生育環境は年々厳しさを増しています。代用品が主流となる中、大沢のワサビは、**地域の自然と食文化を象徴**する存在として、その価値を伝えながら次世代へ継承していくことが求められています。

→江戸でにぎり寿司が流行した頃、栽培されていた在来の貴重なワサビと判明。湧き水を利用して栽培を行っている



◎野川公園と自然観察園、「みどりの愛護ボランティアの会」の取り組み

大沢の里を後にし、野川の流れと護岸の植生を眺めながら向かったのが都立野川公園です。公園に入ると、ワサビ田や国分寺崖線からの湧水が一年中流れる「わき水広場」があり、その奥に**武蔵野の植生を色濃く残す自然観察園**が広がっています。

野川公園は約40万㎡と、東京ディズニーランド1個分に相当する広さを持ち、南側は芝生やスポーツ施設、北側は崖線に沿った自然度の高いエリアが特徴です。ここで長年活動続けてきたのが、「みどりの愛護ボランティアの会」代表世話人の柴田直樹さん。柴田さんは、はけの湧水によって支えられる豊かな生態系に魅せられ、2011年からボランティアとして関わり続けています。昼間でもタヌキやアナグマが見られるこの場所は、都市の中で貴重な自然の拠点となっています。



↑野川公園みどりの愛護ボランティアの会 代表世話人 柴田直樹氏



↑ICUの崖と野川の間位置する自然観察園は、武蔵野の貴重な自然環境を残している

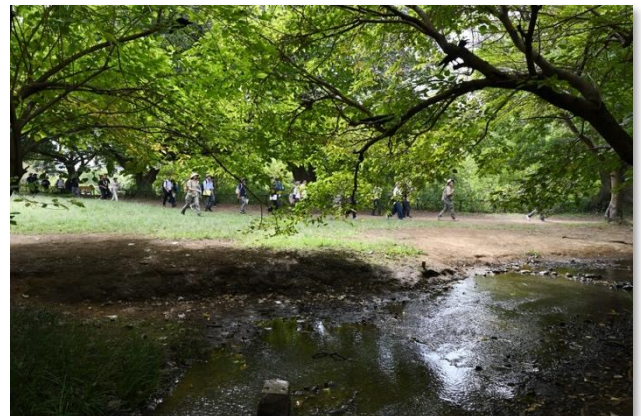
◎自然観察園を歩いて見える、多様な命の風景

自然観察園には、「きんらんの里」「七草山」「かたくり山」など、植生の特徴に合わせたエリアが点在しています。春にはキンラン、秋にはヒガンバナが咲き誇り、昨年数えたヒガンバナは約1万9,000本にも及びました。

柴田さんたちは、月に2回「自然観察園の花だより」を作成し、見頃の花や場所を来園者に伝えています。また、アザミを多く植えたエリアには昆虫が集まり、**渡り蝶アサギマダラ**が群馬県から飛来したこともありました。池や樹木には名前と解説が付けられ、「この木なんの木」といった**資料と連動して学べる工夫**もされています。

園内は今回歩いたのが全体の一部にすぎず、訪れるたびに新しい発見がある場所です。

「定期的に観察会も行っていますので、ぜひ季節ごとに足を運んでみてください」と柴田さんは話します。



↑はけから流れ出る湧き水を湛える「湧き水広場」



↑ボランティアなどの協力で、貴重な動植物の生態系を保全している

◎エクスカージョンを終えて～はけがつなぐ、自然と人の連なり～

自然観察園を出て野川を挟んだ向かいに見えるのが、午後のはけフォーラムの会場となる**都立野川公園自然観察センター**です。

午前中に歩いたICU キャンパス、大沢の里、野川公園と自然観察園は、それぞれ異なる主体によって守られてきた場所ですが、いずれも国分寺崖線、すなわち「はけ」の恵みによって成り立つひと続きの自然でした。

エクスカージョンを通して見えてきたのは、個々の拠点を点として守るだけでは、もう自然は維持できないということ。崖線の森、湧水、湿地、そして人の暮らしは相互に影響し合いながら存在し、その連なり全体を捉える視点が求められています。

全体の進行を務めた金本敦志（武蔵野の公園パートナーズ エコロジカルマネージャー）は、35年にわたり活動してきた自然観察センターが、これからは地域と連携し、自然をどう守り、次世代へつないでいくかを共に考える「プラットフォーム」として生まれ変わろうとしていると語りました。

午前中に体感した「はけの連なり」は、午後のフォーラムでの議論へと静かに熱く引き継がれていきます。



↑ゴールは「はけフォーラム」の開催会場。みなさまおつかれさまでした

第4回はけの自然とくらしのフォーラム 詳細レポート

日時：令和7年9月29日(月) 13:00～16:00

会場：都立野川公園自然観察センター

共催：武蔵野の公園パートナーズ／NPO法人Green Connection TOKYO

協力：一般財団法人世田谷トラストまちづくり／学校法人国際基督教大学／三鷹市生涯学習課

後援：東京都／国分寺市／三鷹市／府中市／小金井市／調布市／世田谷区

開会の挨拶と開催趣旨



↑ 武蔵野の公園パートナーズ本部 丸山浩司氏
(西武造園所属)

午後からは、都立野川公園自然観察センターにてフォーラムが開催されました。木のぬくもりを感じる館内には、国分寺崖線の地形や生態系を紹介する展示が設えられ、22団体約49名の参加者が集いました。

◎開会の挨拶

はじめに、指定管理者である武蔵野の公園パートナーズ本部の丸山浩司さんより開会の挨拶がありました。丸山さんは、同団体が7つの都立公園を管理する中で、「むさしのパークイニシアチブ」として産官学民の協働を重視していることを紹介し、とりわけ国分寺崖線に残る貴重な動植物や生態系を、点ではなく“面”として保全・活用していく必要性を強調しました。



↑ GCT 代表 佐藤留美氏

◎開催趣旨

続いて、NPO 法人 Green Connection TOKYO（以下 GCT）代表の佐藤留美さんより開催趣旨の説明がありました。

国分寺崖線と立川崖線は、古代多摩川の流路変遷によって形成された河岸段丘であり、湧水や湿地、里山環境が今も都市の中に残る貴重な自然です。「はけフォーラム」は、こうした崖線を一体的に保全・活用するためのプラットフォームとして、管理主体同士のネットワーク構築と協働を目的に開催されてきました。第4回となる今回は、リニューアルした自然観察センターを拠点に、「崖線緑地のネットワークング」をテーマとして、連携の可能性を探る場となりました。

◎これまでののはけフォーラムの経緯と台湾国際シンポジウム

続いて佐藤さんから、これまでの「はけの自然とくらしのフォーラム」の歩みが紹介されました。第1回はオンライン開催で「国分寺崖線の状況共有」をテーマに、関係団体が互いを知ることからスタート。第2回もオンラインで「崖線緑地の安全管理」を取り上げ、植生や管理の課題について学びました。第3回は初の対面開催となり、「自然共生サイト」をテーマに、日立製作所 中央研究所とICU 三鷹キャンパスが認定を受けた事例を共有しました。そして第4回では、「崖線緑地のネットワーキング」を掲げ、拠点活用や地域連携、普及啓発を本格的に議論する段階へと進んでいます。

あわせて、佐藤さんは2024年7月に台湾で開催された国際シンポジウムへの登壇についても報告しました。自然共生サイトの認定が始まった台湾では、日本の取り組みが先進事例として注目されており、「はけフォーラム」は流域の緑地をつなぐモデルとして高く評価されたといいます。台湾でも、河川流域を軸に官民が連携し、希少種をテーマにした環境教育や施設整備が進められており、国境を越えた学び合いの重要性が共有されました。今後も、こうした国際的な視点を取り入れながら、地域連携の可能性を広げていくことが期待されます。



↑台湾のネイチャーポジティブの取り組みを視察。台湾でも河川流域を軸にした環境教育や施設整備が進められています

参加団体の紹介

続いて、参加団体の紹介が行われました。

国分寺崖線に関わる多様な主体が集い、**国分寺市・小金井市・三鷹市・府中市・調布市・世田谷区**の5市1区に加え、東京都の三つの部局からも参加がありました。また、第1回から本フォーラムを支えてきた地域環境計画のメンバーや、オブザーバーの方々も顔をそろえました。

司会を務めた武蔵野の公園パートナーズのパークコーディネーター、坂本萌さんが自治体名を呼び上げ、挙手による確認の後、所属が別れた班ごとに自己紹介を実施しました。同じ国分寺崖線に関わっていても、自治体や立場が異なることで面識のない参加者も多く、この時間が**新たな交流のきっかけ**となりました。

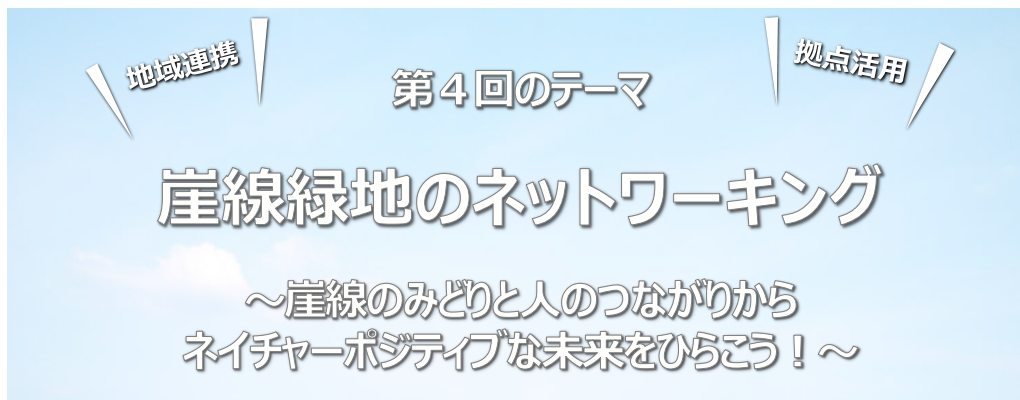


↑国分寺崖線周辺で活動している参加者同士のつながりがひろがりました



↑テーブルごとに異なる団体が集まり、交流

ワークショップ



◎ネイチャーポジティブとは

ワークショップのテーマは「崖線緑地のネットワークング～崖線のみどりと人のつながりから、ネイチャーポジティブな未来をひらこう～」です。ここから司会を交代した武蔵野の公園パートナーズの最首希咲さん（NPO birth 所属）より、「ネイチャーポジティブ」についての解説がありました。

ネイチャーポジティブとは「自然再興」を意味し、生物多様性の損失を止め、回復へと転じていくことを目指す世界共通の目標です。日本でも2030 年までに陸と海の 30%以上を健全な生態系として保全する「30by30」が掲げられ、政策や地域の取り組みが進められています。

はけフォーラムでは、こうした大きな目標を、国分寺崖線という身近なフィールドで、人と人とのつながりを通して実現していくことを目指しています。



↑ 今回のテーマ「崖線緑地のネットワークング～崖線のみどりと人のつながりから、ネイチャーポジティブな未来をひらこう～」について解説します



←公園が発行する「MUSASHINO PARK-LIFE MAGAZINE vol.21」の特集は「Park Life×ネイチャーポジティブ」

◎事前アンケート結果の共有

続いて、国分寺崖線に関わる団体を対象に実施した事前アンケートの結果が共有されました。行政、企業、大学、市民団体、NPO など 31 団体から回答があり、そのうち約 89%がすでに何らかの連携を行っていることが分かりました。緑地管理や希少種の保全、外来種対策、環境調査、普及啓発イベントなど、活動内容は多岐にわたっています。

一方で、多くの団体が「連携をさらに広げたい」と考えており、人材育成やボランティアの

確保、企業や学生の参加、専門家との協働などを課題として挙げていました。

これらの声は、まさに今回のフォーラムの目的と重なるものであり、ワークショップでは、連携の方法や課題を共有しながら、それぞれの取り組みにつなげていくことが期待されました。

今後、他団体と連携したい活動の内容

- 環境ネットワークを創りたい
- 今回の会を通じて、他団体との連携を深め学習会など実施して **人材育成**を図りたい
- 緑地管理において、更に多くの学内外の関係者と連携したいと考える
- 自然環境保全：隣接する病院との連携
- 企業の社員ボランティアや地元大学の学生ボランティア等の受け入れ拡充、専門家による取り組みへの評価に関する助言等
- 市民団体が高齢化しているため、次世代を担う人材の育成（講習会など）
- わさび育成環境の保全、わさび活用のためのイベント
- 野川源流域の連携

↑ 事前に集めたアンケートを共有しました

本フォーラムに期待すること・話したいこと

- 環境ネットワーク創り
- はけ周辺の自然環境の問題点について。高木化、荒地化などについて、土地所有者ではない一般市民が、協力できることなどはないのかなど
- はけの保全、湧水の保全
- 地域の自治体やビジネスセクターと活動団体との連携に期待しています
- はけと野川の保全についての歴史と現状の広報強化などについて
- 人材育成、広報活動について。
- 引き続き、崖線の魅力普及活動に関してお互いに協力したいと考えます
- 緑地管理に関する素人のもわかるような技術指導
- 本学では、現在、「東経の森」と呼んでいる崖線緑地の再生、若返り更新の実現に向けた森の管理活動を行っています。これに関わる取り組みの参考事例をお聞きたいと思っています。また、再生整備を進めながら、「東経の森」が学生の憩いと学びの場所となり、また地域の方々との縁結びの場所となるようにしていくには、どんなことを企画していったらよいのか、そのヒントをいただければ、と思っています
- 府中市では、2020年に植生管理ガイドラインを策定し、緑地の管理を行っている。本フォーラムにおいて、紹介するとともに各団体の取り組みなどを聞きたい
- この機会に皆様と一緒に学び合えればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。
- 希少生物に関する調査の連携、調査成果の共有法
- 連携については 公式と地域としてのつながり等ビジネス的、或いは研究や調査の活動のつながり等の線引きの有無

↑ 多くの参加者が連携に期待をしていることがわかりました

話題提供 ①

はじめに、武蔵野の公園パートナーズ 都立野川公園自然観察センターの赤田晴香さん（NPO birth 所属）より、野川公園と自然観察園、そしてリニューアルした自然観察センターの役割と、そこで進められているネイチャーポジティブな取り組みについて話題提供がありました。

→武蔵野の公園パートナーズ 都立野川公園自然観察センター 赤田晴香氏



◎野川公園自然観察センターの新たな役割と計画

野川公園は 1980 年に開園した都立公園で、約 40 ヘクタールと東京ディズニーランド 1 個分に相当する広さを有しています。国分寺崖線からの湧水によって、池・湿地・草原・雑木林など多様な環境が共存し、キンランやホトケドジョウといった希少種も見られます。こうした自然を守るため、1988 年に自然観察園と自然観察センターが整備され、長年にわたり自然学習と保全活動の拠点として機能してきました。

2024 年 11 月、老朽化に伴い自然観察センターは建て替えられ、地域の声を反映した施設としてリニューアルオープンしました。

新たなセンターは「野川とはけを取り巻く武蔵野エリアの自然・歴史・文化を守り育むネットワークの拠点」として再定義され、

- ①普及啓発・保全
- ②地域ネットワーク構築
- ③人材育成

の三つを柱に運営されています。



この方針を支えるのが、エコロジカルマネージャー、パークレンジャー、パークコーディネーターといった専門スタッフです。

エコロジカルマネージャーは GIS などを用いて生きものの分布を分析し、保全計画を立案・実行。希少種の確認数は約 10 種から 115 種へと大きく増加しました。

パークレンジャーは調査と普及を担い、展示やガイドを通して自然の魅力を伝えています。

さらにパークコーディネーターが地域連携やボランティア活動を支え、センターは人と自然をつなぐ中核的な存在となっています。



◎公園によるネイチャーポジティブアクション

野川公園では、「ネイチャーポジティブアクション」として、**生物多様性の回復**に向けた具体的な取り組みが進められています。代表的な事例の一つが、東京都レッドリストで絶滅危惧 IB 類に指定されている**ニホンアカガエルの生息地拡大**です。2011 年当時、武蔵野地域で明確に繁殖が確認されていたのは野川公園周辺のみでしたが、GIS を活用して生息条件を分析し、ボランティアと協力して水辺環境を再生した結果、産卵数は増加。2024 年には隣接する武蔵野公園まで生息が広がり、過去最多となる 200 以上の産卵が確認されました。

また、国分寺崖線の水辺景観の再生として、江戸東京野菜に選定されている「**三鷹大沢ワサビ**」の復活にも取り組んでいます。湧水量の減少で一度は途絶えたと考えられていたワサビですが、遺伝子検査により貴重な系統が残っていることが判明し、三鷹市、ICU、野川公園が連携して 2024 年に再生プロジェクトを開始しました。



さらに、学びの場として「むさしのカレッジ」を展開し、自然観察センターを拠点に屋内外を行き来する講座を実施しています。ICU やアメリカンスクール・イン・ジャパンなど**教育機関とも連携**し、雑木林管理やナラ枯れ対応など実践的な環境教育を進めています。これらの取り組みは、公園を単なる緑地ではなく、地域とともに自然を再興していく拠点へと進化させています。



話題提供 ②



↑一般財団法人 世田谷トラストまちづくり 荒井千鶴氏

国分寺崖線の東端に位置する世田谷区から、一般財団法人 世田谷トラストまちづくりの荒井千鶴さんをお招きし、崖線でつながる地域としての世田谷における緑地保全と市民協働の取り組みについて、話題提供をいただきました。国分寺崖線は世田谷から多摩地域へと連なっており、荒井さんからは、その東側拠点としての実践や課題、広域連携の可能性についてお話がありました。

◎世田谷トラストまちづくりとは

世田谷区は東京都 23 区の中で 2 番目に広い面積を持ち、人口は約 90 万人にのぼる住宅都市です。宅地が約 7 割を占める一方、国分寺崖線に沿った南西部には湧水や斜面林など緑の濃い地域が残ри、地域差が大きいのが特徴です。こうした環境の中で活動しているのが、一般財団法人世田谷トラストまちづくりです。同財団は 2006 年、区民参加型の緑の保全を進めてきた「せたがやトラスト協会」と、住民主体のまちづくり支援を行って

きた「世田谷区都市整備公社」を統合して設立されました。現在は職員 66 名体制で、みどり保全と市民まちづくりを軸に、中間支援組織として多様な地域プロジェクトを展開しています。

トラストみどり課の大きな特徴は、公園などの公有緑地だけでなく、市民緑地制度を活用した民有地の保全にも積極的に取り組んでいる点です。約 500 名



のボランティアに支えられ、企業や団体との協働、会員制度による支援も組み合わせながら、環境学習や自然体験の機会を地域に広げています。

◎活動事例と課題

成城地区では、世田谷トラストまちづくりの活動が面的に展開されています。拠点となる「世田谷区トラストまちづくりビジターセンター」は、情報発信とボランティア活動の場として機能し、展示や上映会、季節のイベントなどを通じて幅広い世代が自然と関われる空間となっています。

市民緑地制度では、土地所有者と契約を結び、緑地を公開・管理する仕組みを整え、現在16か所が運営されています。代表例の「なかんだの坂市民緑地」では、26年にわたり地域住民と所有者がともに保全を続け、都市では貴重な植生が維持されています。また、より小規模な庭を対象とした独自の「小さな森」制度では、崖線地形を生かした個人宅の緑が地域の共有資源となっています。

一方で課題もあります。地域密着型ゆえに崖線全体を俯瞰する広域的視点が不足しがちなこと、ボランティアの高齢化、活動成果の見える化の難しさなどが挙げられました。荒井さんは、拠点間の交流や日常的なコラボレーションを通じた「顔の見える関係づくり」と、世代や立場を超えた連携の必要性を提案し、今後のネットワーキングに期待を寄せました。



成城三丁目緑地 里山づくりコア会議の主な活動

■ 里山づくりコア会議：世田谷区、財団、トラストボランティア、地元小学校の四者で構成

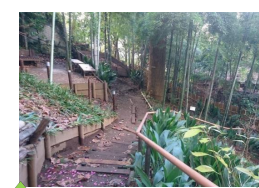
総合学習支援
下草刈り
樹木剪定
落ち葉かき
腐葉土づくり
土留め補修
巡回点検
など

一般財団法人 世田谷トラストまちづくり
SETAGAYA TRUST & COMMUNITY DESIGN



16か所の市民緑地

計 15,431.92㎡ (2025年8月末日現在)

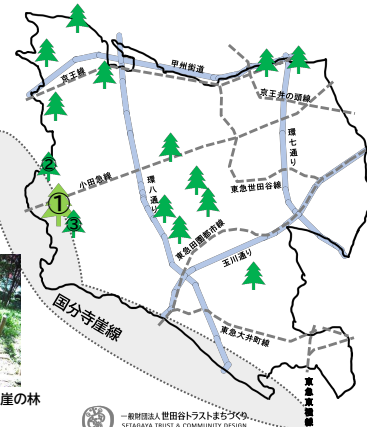


① 成城三丁目なかんだの坂



成城四丁目発明の杜

成城三丁目崖の林



一般財団法人 世田谷トラストまちづくり
SETAGAYA TRUST & COMMUNITY DESIGN

ワークショップ後半 グループディスカッション

休憩後は、ファシリテーターである武蔵野の公園パートナーズの最首希咲さんの進行のもと、参加者は班ごとに分かれてグループディスカッションを行いました。

本日のテーマ「崖線緑地のネットワークング」に基づき、地域連携や拠点活動を進めるうえでの課題や悩みを共有することを目的としました。付箋と模造紙を使い、課題を共有。解決策のアイデアを話し合いました。最後に、各班の代表者が模造紙を掲示し、内容を発表。現場ならではの課題とともに、連携の可能性を広げる具体的な視点が共有されました。



↑ 武蔵野の公園パートナーズ
最首希咲氏（NPO birth 所属）

●グループディスカッションで共有された主な課題

- 人手不足・担い手不足
 - 行政・市民団体・大学・企業のいずれも慢性的な人材不足
 - 特定の熱心な個人に活動が依存しがち
 - 世代交代が進まず、継続性に不安がある
- 連携の難しさ・労力の大きさ
 - 行政区を越えた連携や情報収集が難しい
 - 他団体と「どうつながればよいか分からない」
 - 連携したい気持ちはあるが、きっかけが作りにくい
- 情報発信・広報の課題
 - 活動の価値や成果が伝わりにくい
 - SNS での発信は有効だが、公開範囲や秘匿性とのバランスが難しい
 - 評価の基準が曖昧で、取り組みが正當に評価されにくい
- 予算・制度・制約の問題
 - 保全や連携のための予算が不足している
 - 行政・企業・大学それぞれに制度上の制約が多い
- 自然管理に関する課題
 - 外来種対策や復旧活動の維持・拡大
 - 緑地の特性と利用・効果のバランス
 - 「保護＝放置」では維持できないという認識の共有不足

◎ 課題に対する主な解決案・アイデア

● 見える化・情報整理

- 活動内容や成果を SNS・パンフレット・データベースで可視化
- 評価の方向性を共有するガイドラインや指針づくり
- 自然や活動を一元的に発信する「デジタルミュージアム」の活用

● 人材・担い手づくり

- ボランティアポイントなど参加を可視化・評価する仕組み
- 大学のサービスラーニング（地域貢献と学びを結びつける教育プログラム）や学生ボランティアの活用
- 団体間で人材を派遣・共有する仕組みづくり

● 連携を促す仕組み

- 行政区を越えたプラットフォームの構築
- 中間支援団体がハブとなるネットワーク形成
- 定期的な交流会や情報交換の場の設定

● 体験型・参加型の企画

- 緑地巡りツアー、崖線巡りマップの作成
- 子どもの自由研究につながるイベント
- 食や体験を組み合わせた、参加しやすい催し

● ストーリー性のある発信

- 「はけのストーリー」として歴史や記憶を継承
- 世代を超えて伝わる言葉や表現の工夫
- 自然の価値を身近に感じてもらう解説・教材づくり

● 企業・大学との関わり方

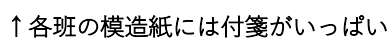
- 短時間（早朝 1～2 時間）で参加できる活動設計
- 行政からの後押しやお墨付きによる参加促進
- 施設利用者・社員・学生に向けたわかりやすい資料提供



↑それぞれのグループで問題点を共有し、
決策のアイデアを出し合いました



↑班ごとに話し合った内容を発表



閉会の挨拶・グラフィックレコーディングの紹介



↑閉会の挨拶をする GCT 佐藤留美氏

フォーラムの締めくくりとして、GCT 代表の佐藤留美さんより、本日の総評がありました。

佐藤さんは、「これまで私たちは“崖線の緑をつなげよう”と考えて活動してきましたが、実は“崖線のみどりに、私たちがつないでもらっている”のだと感じました」と語り、多くの人が集い、学び合う場が生まれていること自体が、“はけ”の存在に支えられているのだと、あらためて思いを共有しました。

また、話題提供を通して、**中間支援の大切さ**について多くの気づきがあったことにも触れました。世田谷トラストまちづくりや武蔵野の公園パートナーズのように、間に立って関わる存在があることで、人と人、地域と地域がゆるやかにつながり、学びや交流の場が生まれていることを実感したといいます。

今後に向けては、「**拠点**」「**事業**」「**組織**」という**三つの柱**がそろうことで、より強いネットワークが育まれていくのではないかと展望を語りました。公園や施設、オンラインの場も含めた拠点づくり、人が関われる事業の広がり、そして主体を超えて支え合う体制が、次の一步につながっていくことへの期待が込められていました。

あわせて、フォーラムの全体を通して春仲萌絵さんが描いた**グラフィックレコーディングが完成**し、国分寺崖線をめぐる人と活動のつながりが、

ひと目で伝わるかたちとなりました。

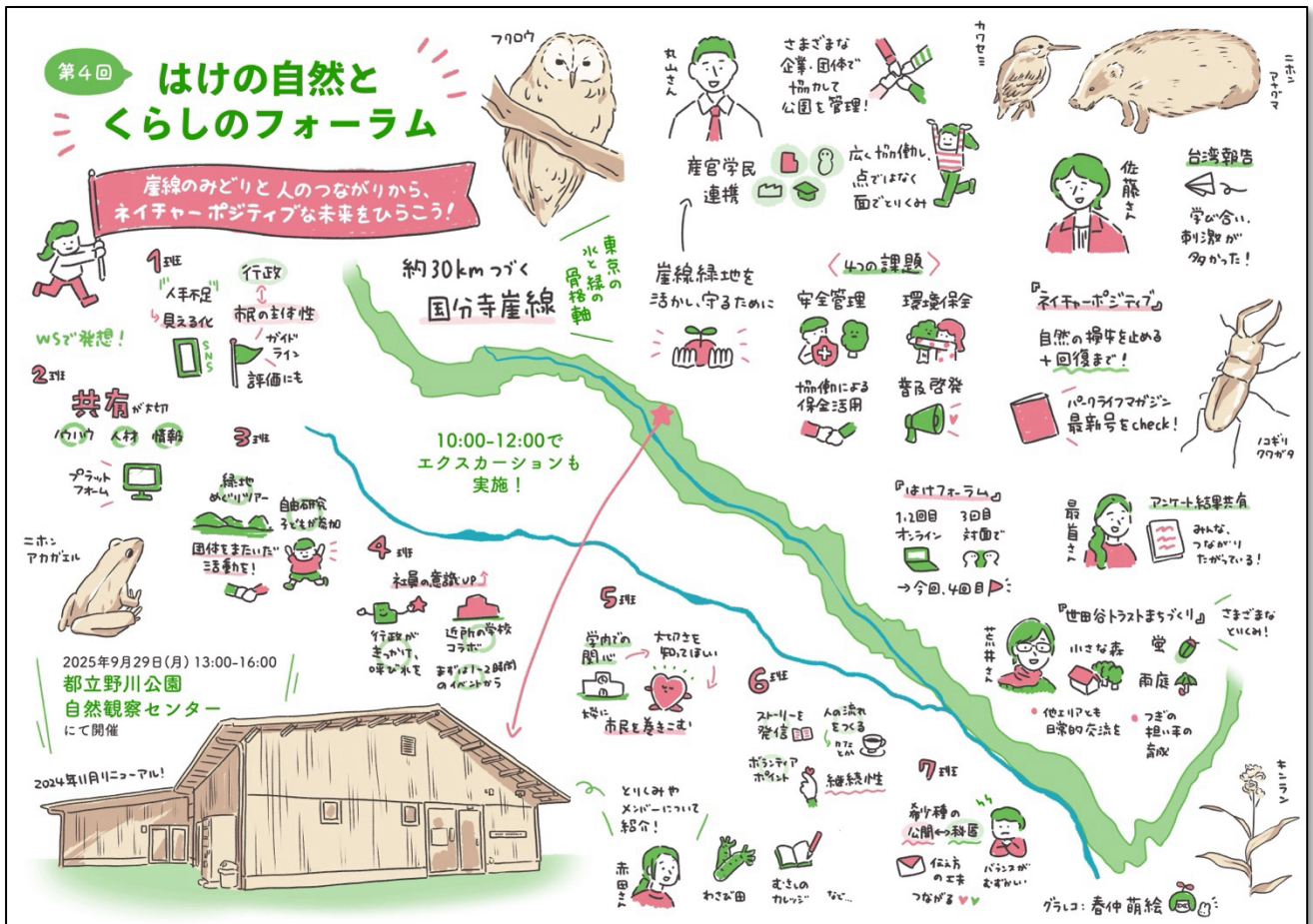


佐藤さんは、今回生まれたつながりを大切にしながら、今後もこのフォーラムを続けていきたいと呼びかけ、感謝の言葉とともに会を締めくくりました。

←グラフィック・クリエイター 春仲萌絵氏



←自然観察園内に展示されている国分寺崖線の模型



↑最後に完成したグラレコを公開！ 当日の様子を一枚のビジュアルで記録してくれました